



安心 1.0～3.0へ AI 1.0～3.0へ

2025.10.29

※本資料は、当社グループの経営戦略・研究的取組の説明を目的とするものであり、特定の診療・治療の勧誘や、医療機器・食品等の効能効果を示す広告ではありません。

アニコム ホールディングス株式会社



第一部 「創業来25年の振り返り ～ 新たな戦略の策定 ～」

1. 25年間で達成できたこと
2. 今後なすべきこと（新戦略の必要性和その方向性）
3. 資料編

第二部 「新戦略 その1 ～ 保険1.0から3.0へ ～」

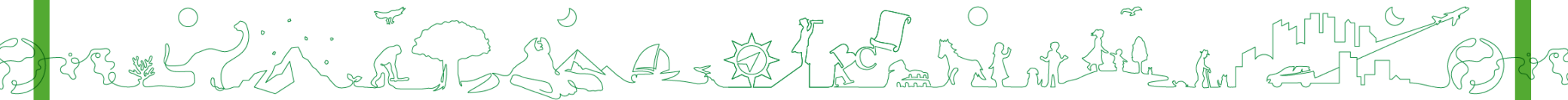
1. 全体像：保険1.0 → 2.0 → 3.0
2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～
 - （1）ペット保険の本質的課題
 - （2）免疫の脆弱性に「予防実現性の科学的可能性」
 - （3）免疫の司令塔「制御性T細胞」と「酪酸」
 - （4）食事の多様性と腸内細菌叢の多様性
 - （5）若齢疾患の予防と高齢化リスク

第三部 「新戦略 その2「保険3.0」 ～ AI1.0から3.0へ ～」

1. 医療の課題と新たな解決策について
 - （1）医療の「危険・きつい・汚い（3K／3D）」という構造的課題
 - （2）他産業で、この壁を乗り越えた共通解は「機械化」と「AI活用」
2. AIの進化 ～ AI1.0～3.0へ ～
3. JARVIS Tokyo プロジェクトの始動
 - （1）2025年10月1日より、アニコムグループでは「JARVIS Tokyoプロジェクト」を正式に始動
 - （2）ロボットの手術分野への活用は、新たなAI3.0時代への進化に繋がる可能性
 - （3）さらに、どうぶつの行動や生体データから感情を解析する感情AI（日米特許取得）が加速させる
4. 「免疫×ロボ×AI」は保険・医療の共進化で未来を拓く

第一部

「創業来25年の振り返り ～ 新たな戦略の策定 ～」



1. 25年間で達成できたこと

アニコムは創業以来、「どうぶつを守る保険会社」から、
「どうぶつの生命と心を支えるインフラ企業」へと進化してきました。

その歩みの中で実現し得たことは、
“安心”を経済的給付から生命科学的安心へと再定義する新たな戦略の創出です。



2. 今後なすべきこと（新戦略の必要性和その方向性）

「保険1.0から3.0への進化」を「AI1.0から3.0の活用」で実現していきます。
単なるデジタル化にとどまることなく、生命の仕組みを理解し、科学と愛で
“偶然ではない更なる必然の幸せ”をデザインする企業として未来の価値を創出していきます。

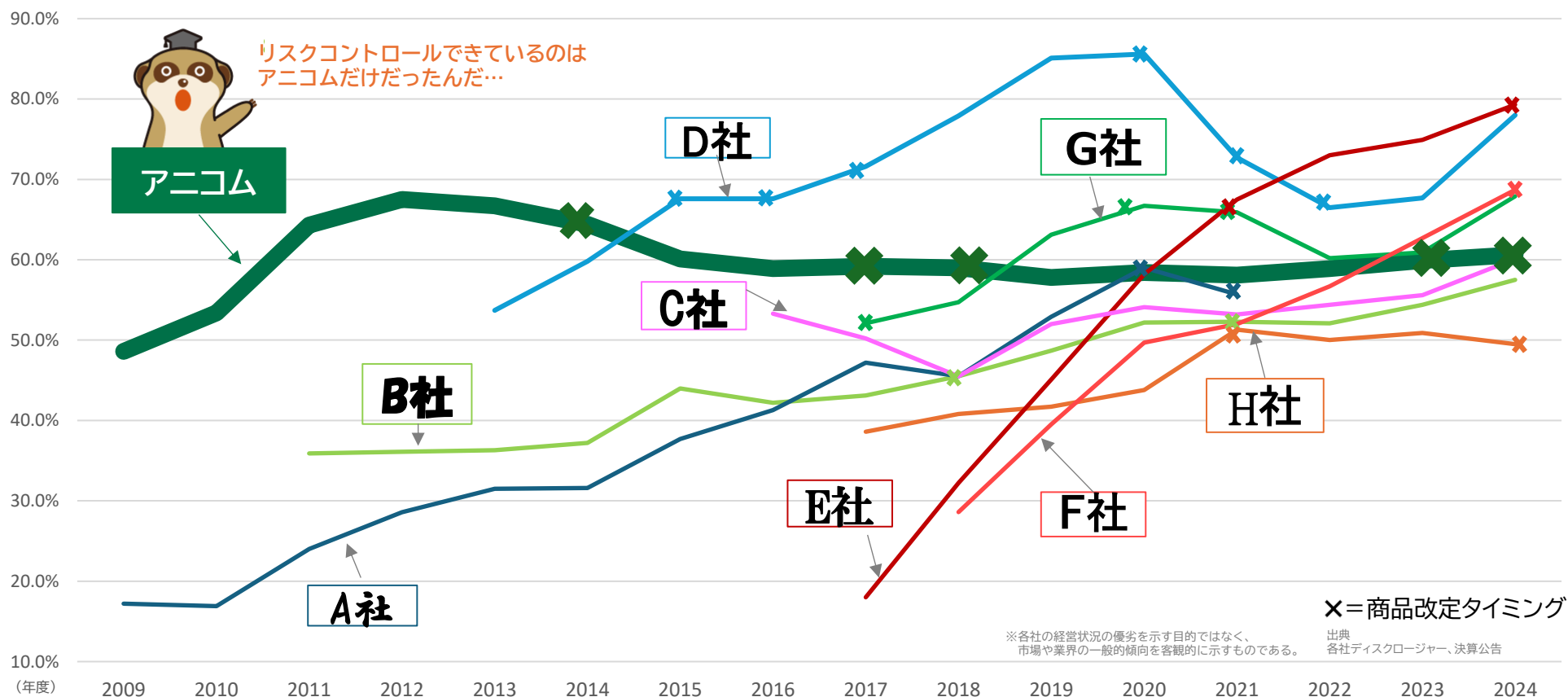


3. 資料編

ペット保険における競合状況

各社の**損害率**(EIベース)の状況

「保険料 < 支払保険金」で収支悪化

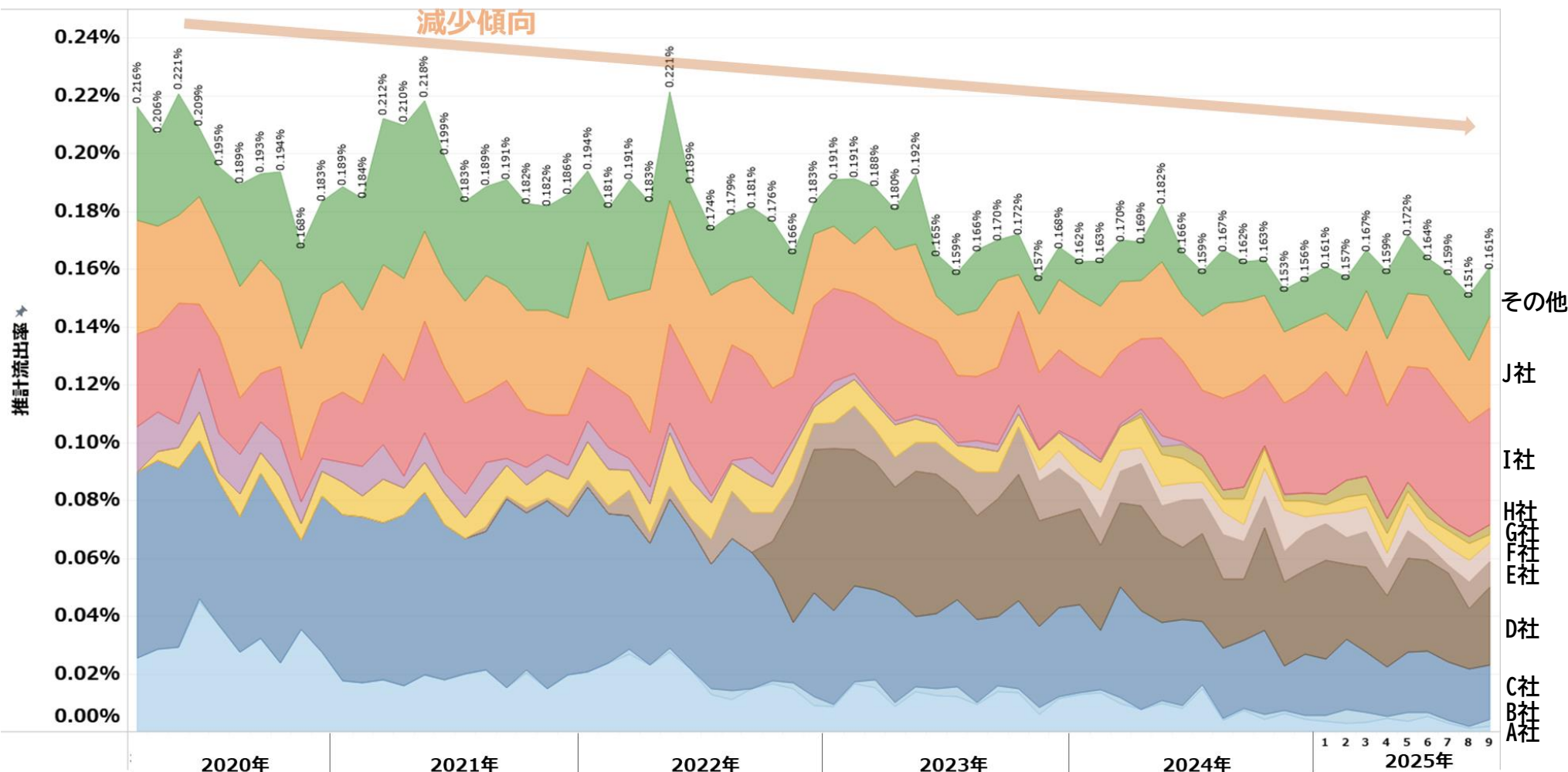


ペット保険は世界でも稀に見る競争激化市場 ~しかし、当社は安定経営に成功~

3. 資料編

競合他社への流出の状況（比率ベース）

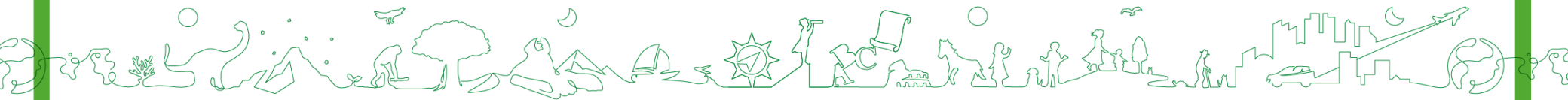
■解約時アンケート：2020年3月～2025年9月
 (※)非継続契約者に対するWebアンケート結果を用いて推計したアニコム損保から他社へ流出した保険契約件数が、流出が発生した月の保有契約件数に占める割合



他社への流出は減少傾向

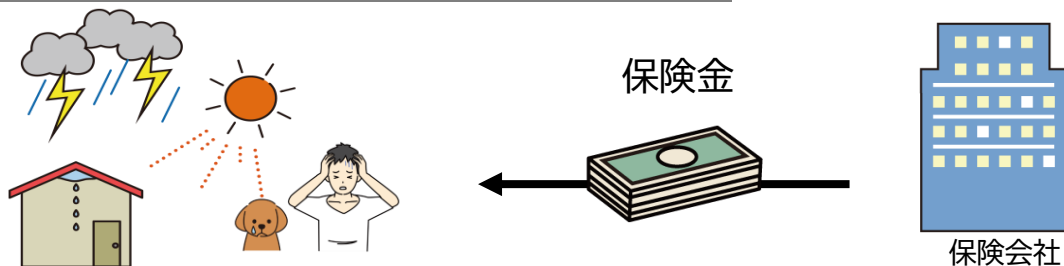
第二部

「新戦略 その1 ～ 保険1.0から3.0へ ～」

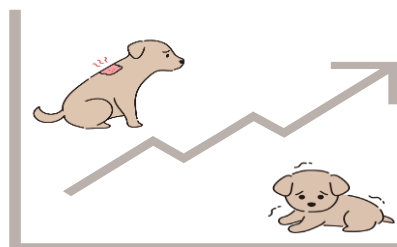


1. 全体像：保険1.0 → 2.0 → 3.0

保険1.0：経済的給付による「安心の提供」



保険2.0：傷病の「予防」こそ「真の安心提供」のひとつ



保険会社



「入って健康になる保険」で
グッドデザイン賞受賞！

保険3.0：すべての予防は不可能

だからこそ、『痛みの低減と成功可能性を高めるための医療の実現』を目指します。



これらが、アニコムが描く“生命サイクル全体で新たな安心を創出する保険”の進化の形です。

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(1) ペット保険の本質的課題

- ① 犬・猫における保険金支払いの最大理由は「嘔吐・下痢・血便・胃腸炎・元気喪失」。これらは保険金支払いの約10%以上を占め、死亡時請求でも上位を占めています。

【犬】疾患別保険金支払件数ランキング



順位	疾患名	請求件数(件)
1	嘔吐・下痢・血便	256,446
2	弁膜症	229,517
3	原因不明の皮膚疾患	188,434
4	胃炎・胃腸炎・腸炎	169,155
5	慢性腎臓病・腎不全含む	161,280
6	原因未定の外耳炎	153,953
7	膿皮症・細菌性皮膚炎	116,651
8	アレルギー性皮膚炎・抗原特異的	110,929
9	アトピー性皮膚炎	84,407
10	てんかん	70,648
11	皮膚の痒み	66,945
12	歯周病・歯肉炎・乳歯遺残に起因するもの含む	64,488
13	胆泥症	58,086
14	歩行異常・跛行・四肢の痛み	57,570
15	元気喪失・食欲不振含む	54,383
16	肺炎	53,655
17	細菌性外耳炎	53,002
18	膀胱炎	50,121
19	消化管内異物・誤飲	49,849
20	外傷・挫傷・擦過傷・打撲	45,723

【猫】疾患別保険金支払件数ランキング



順位	疾患名	請求件数(件)
1	慢性腎臓病・腎不全含む	79,135
2	嘔吐・下痢・血便	54,777
3	膀胱炎	30,498
4	胃炎・胃腸炎・腸炎	26,841
5	原因不明の皮膚疾患	19,577
6	結膜炎・結膜浮腫含む	18,807
7	心筋症	16,185
8	元気喪失・食欲不振含む	13,397
9	尿石症	11,670
10	糖尿病	10,358
11	原因不明の泌尿器疾患	9,807
12	原因未定の外耳炎	8,428
13	歯周病・歯肉炎・乳歯遺残に起因するもの含む	8,176
14	くしゃみ・鼻汁	8,087
15	鼻炎・副鼻腔炎・上部気道炎	7,744
16	外傷・挫傷・擦過傷・打撲	7,510
17	猫伝染性腹膜炎・FIP	6,684
18	膀胱結石	6,534
19	消化管内異物・誤飲	6,213
20	甲状腺機能亢進症	6,093

※診療開始日:2023/4/1～2024/3/31
 ※「【犬】疾患別保険金占有率ランキング」は、上記期間、3,672,365件の支払済保険金データより算出。
 ※「【猫】疾患別保険金占有率ランキング」は、上記期間、574,914件の支払済保険金データより算出。
 ※診療名にて、「原因未定」を含む診療名は、一部除外。
 ※同一請求に複数の診断名がある場合は、代表的な病名にまとめて集計。

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～

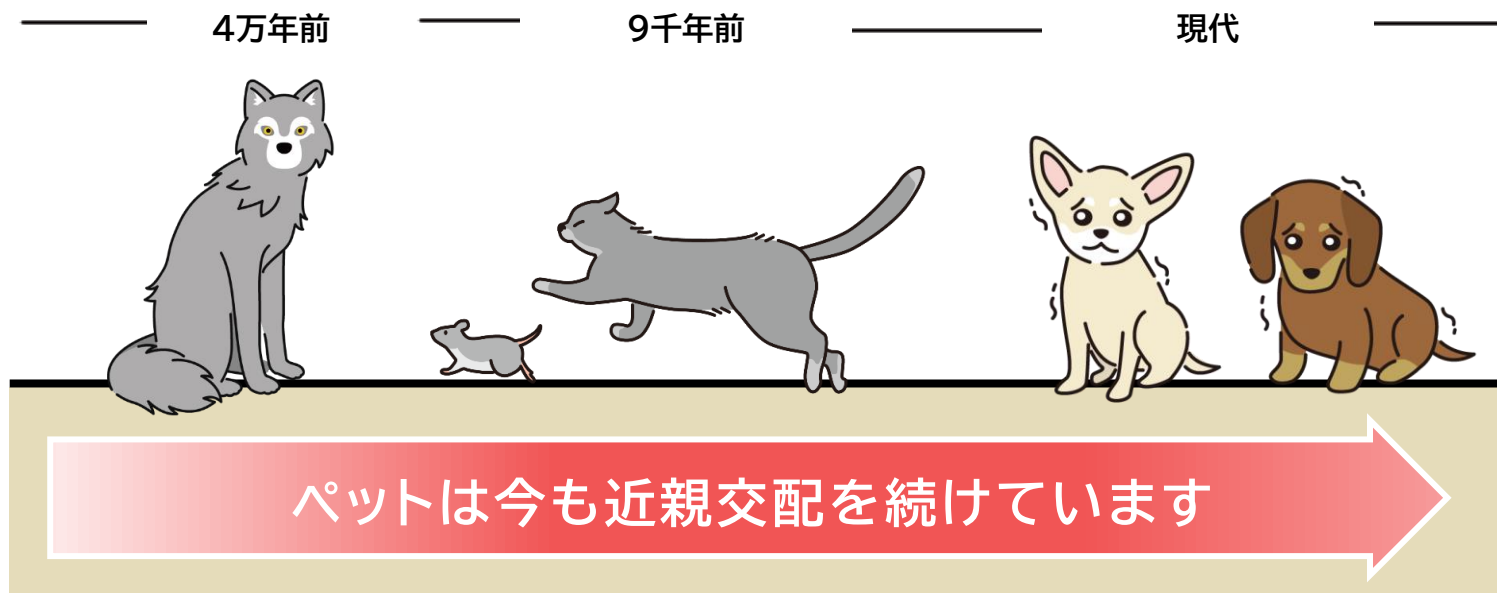


(1) ペット保険の本質的課題

- ② 長期にわたる近親交配は、免疫の多様性を奪い、最も高度な免疫制御が求められる消化管領域に影響を与え得ることが指摘されており、当社も研究対象として注視しています。

**犬は約4万年、猫は約9千年にわたり
人との共生の中で近親交配を重ね、
遺伝多様性が低下してきました。**

ヒトが好む形質を得るため、結果的に長年の近親交配が続けられました。
遺伝多様性の低下と引き換えに得た長所。
「愛くるしい瞳、けなげさ、飼い主さんだいすき」等の長所の遺伝的固定に成功。



2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～

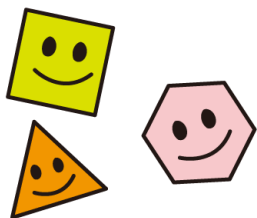


(2) 免疫の脆弱性に「予防実現性の科学的可能性」

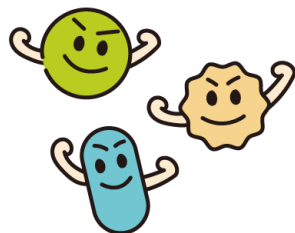
免疫の脆弱性に「予防実現性の科学的可能性」があり得ます。

すなわち——

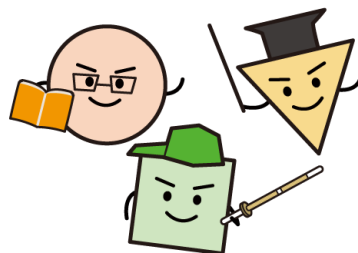
保険収支のさらなる健全化は、免疫の健全化から始まります。



自然免疫さん



獲得免疫さん



頼れる先生たち



もしかして
今回のノーベル賞と
関係があるのでしょうか？

※ペットにおける保険金支払い最大理由への対処

① 保険収支改善における最重要項目

- i ヒト医療では死因の上位とはなり難い「嘔吐・下痢・血便、胃腸炎、元気喪失」が、ペット保険（アニコム損保）における「診察日当日の死亡症例」における保険金請求の上位を占めている。
- ii 同時に、これらは保険金支払いの10%以上を占める。（算出条件等はP10参照）
- iii 免疫の脆弱性は、最も高度な免疫機能発揮が要求されるこれら「消化管に関する疾患等」に現れやすい。
- iv 即ち、犬・猫においては、長期にわたる近親交配の結果としての遺伝多様性の低下による「免疫脆弱性」がペット保険における支払い保険金に対し、最も影響を与えている可能性が示唆されている。

② 予防実現は「免疫の健全化」による

結果として、「免疫の健全化」が、これら疾患等の予防を含めた保険金削減策として最も機能し得る可能性がある。

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(3) 免疫の司令塔「制御性T細胞」と「酪酸」

- ① ノーベル賞で注目を集めている「制御性T細胞 (Treg)」は免疫の司令塔であり、そのエネルギー源として「酪酸」を利用するという特殊性を有しています。

2025年ノーベル生理学・医学賞 坂口教授 制御性T細胞 (Treg) を発見し、免疫における意義を解明

免疫の司令官「Treg」とは？

Tregは、「寛容」と「排除」のバランスを指揮する免疫の司令官。

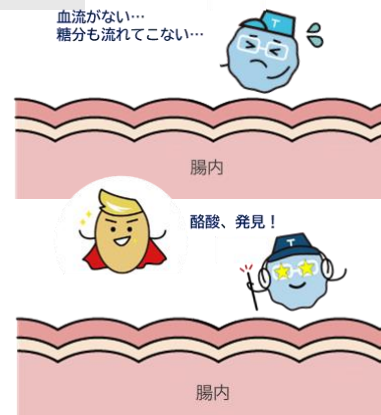
どの細菌を「敵」と見なし、どれを「味方」と認めるか——
免疫の見極めを助け、暴走を防いでいる。

味方を敵と誤認すると自己免疫疾患やアトピー、アレルギー等に。
敵を見過ごすと、感染症やがんなど多くの疾患リスクに繋がる。



Tregは、身体状況に応じて動的に判断し、外界の敵と遭遇することで学習していきます。

- i Tregが学ぶ“教室”は腸の表面（内なる外）。
血管が少ない「野外教室」であるため、他の細胞のように血流から糖分を受け取ることができない。
- ii そこでTregは、自ら「ごはん」を見つけ出す必要がある。
その“ごはん”となるのが「酪酸などの短鎖脂肪酸」。



2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(3) 免疫の司令塔「制御性T細胞」と「酪酸」

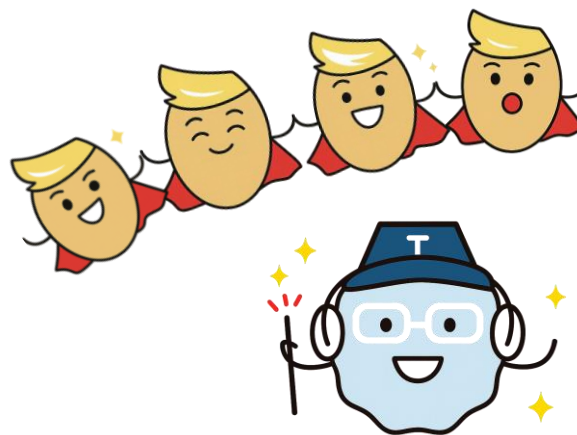
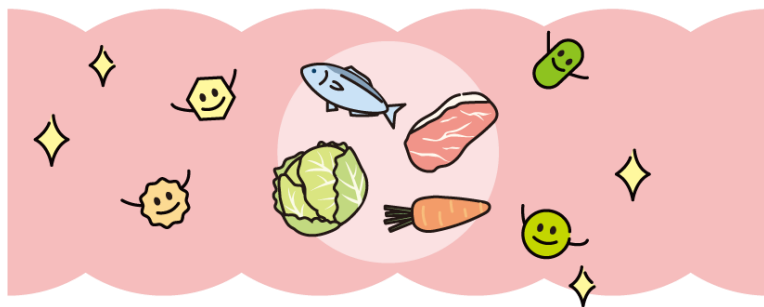
② 「酪酸」は腸内細菌が産生する短鎖脂肪酸で、免疫寛容、皮膚の防御、神経安定物質GABAの誘導などに深く関わっています。

つまり、「酪酸＝生命を調律するあらたな栄養」とも言い得ます。

※上記は学術的知見の紹介であり、特定の疾患の予防・治療等の効果を示すものではありません。

ヒト・犬・猫はいずれも酪酸を体内でほぼ合成できず、腸内細菌叢の多様性に依存しています。腸内細菌の多様性こそが、真の免疫力の一部分を決定づけている可能性があります。

多様性が**高い**群



そうか、毎日の多様なごはんは
制御系T細胞の
ごはんだったんでしゅね



※ノーベル賞受賞で注目された「制御性T細胞」は免疫の司令塔

- ① 免疫は後天的に調整・成熟する
 - i 身体には多くの免疫細胞（警官隊・自衛隊員）が存在しているが、敵・味方の判断を誤ると、大混乱。
 - ii 制御性T細胞等の免疫の司令塔は、後天的に「敵・味方を識別」し、他の免疫細胞にそれを教えている。
 - iii 敵は身体の中には多くはいない。誰かが、敵が多く存在する身体の外側に出て敵を知る必要がある。
 - iv しかし、身体の外側には、細胞のエネルギー源である糖（グルコース）を運ぶ血管が存在していない。
 - v 結果、敵・味方を識別する制御性T細胞（最前線では樹状細胞）等の免疫の司令塔は、糖以外の物質をエネルギー源と使える特殊技能を有している。
- ② 制御性T細胞等は、「酪酸」をエネルギー源として利用できる
 - i 身体の中で最も、敵（細菌等）が多く存在している大腸の便の中である。
 - ii したがって、免疫の司令塔が敵を知るには、便と接している大腸上皮細胞付近まで移動する必要がある。
 - iii しかし、これらの領域においては、常に細菌感染リスクがあること等から、無血管もしくは、極めて血管走行が少ない状況となっている。
 - iv したがって、免疫の司令塔は、豊富に存在している便の中から、自身のエネルギー源として利用可能なものを利用する必要がある。それが「酪酸」である。

- ③ 極めて免疫等の機能発揮に重要な「酪酸」の必要量のほぼ全量は多様な腸内細菌が産生
 - i 「酪酸」は、制御性T細胞等のエネルギー源となるばかりでなく、外部刺激から身を守る毛・爪の90%の構成要素である「ケラチン」の誘導に重要な役割を果たしている。
 - ii また、皮膚は、外部刺激（紫外線等）により最もがんになりやすい部位であるが、皮膚の最外層を守る細胞は核を失う（脱殻）することで、がん抑制を行っている。しかし、核を失った細胞は適切な細胞機能発揮を継続することが困難であり、細胞同士の接続力を失いフケとなって剥がれ落ちやすい。しかし、早過ぎる剥落は内部細胞の防御壁としての機能発揮に繋がらない為、脂質を含むセラミドにより細胞同士の接続を強化し、水分の蒸発・雑菌の侵入等を防ぎ得るいわゆるきめ細やかな皮膚の実現に資している。
 - iii さらに、過度な脳神経の活動を調整役として機能するGABAの誘導にも酪酸は重要な役割を果たし得る。
 - iv このように身体の健康を維持する上で重要な役割を担っている「酪酸」であるが、ヒト・犬・猫ともに、体内の生合成はほぼ出来ない。結果、必要量のほぼ全量を多様な腸内細菌の産生する「酪酸」に依存している。

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(4) 食事の多様性と腸内細菌叢の多様性

- ① ペットフードの多くは、低コスト化や便量抑制のために、タンパク源の単一化・繊維質の低減が進んでいる傾向にあると考えています。



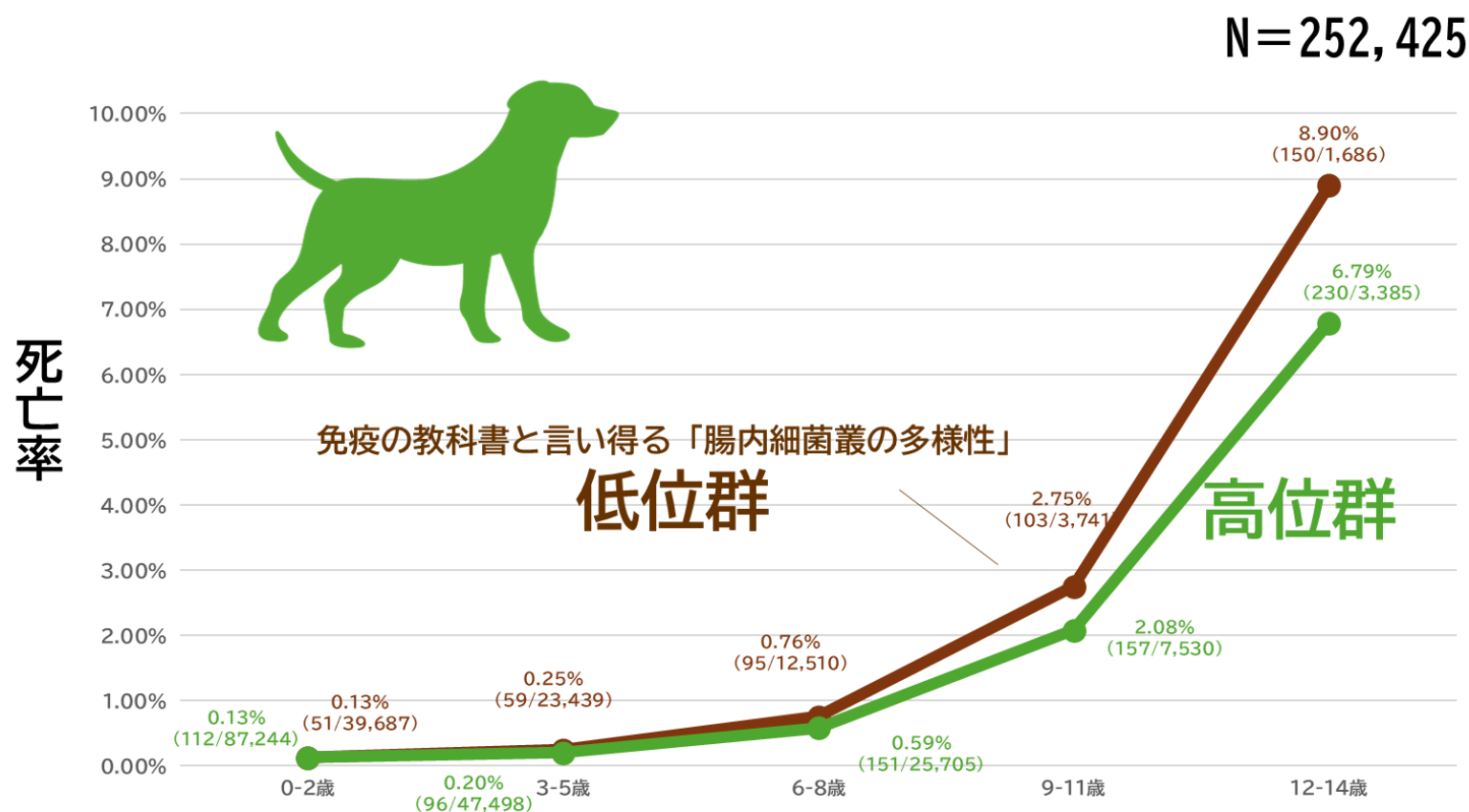
2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(4) 食事の多様性と腸内細菌叢の多様性

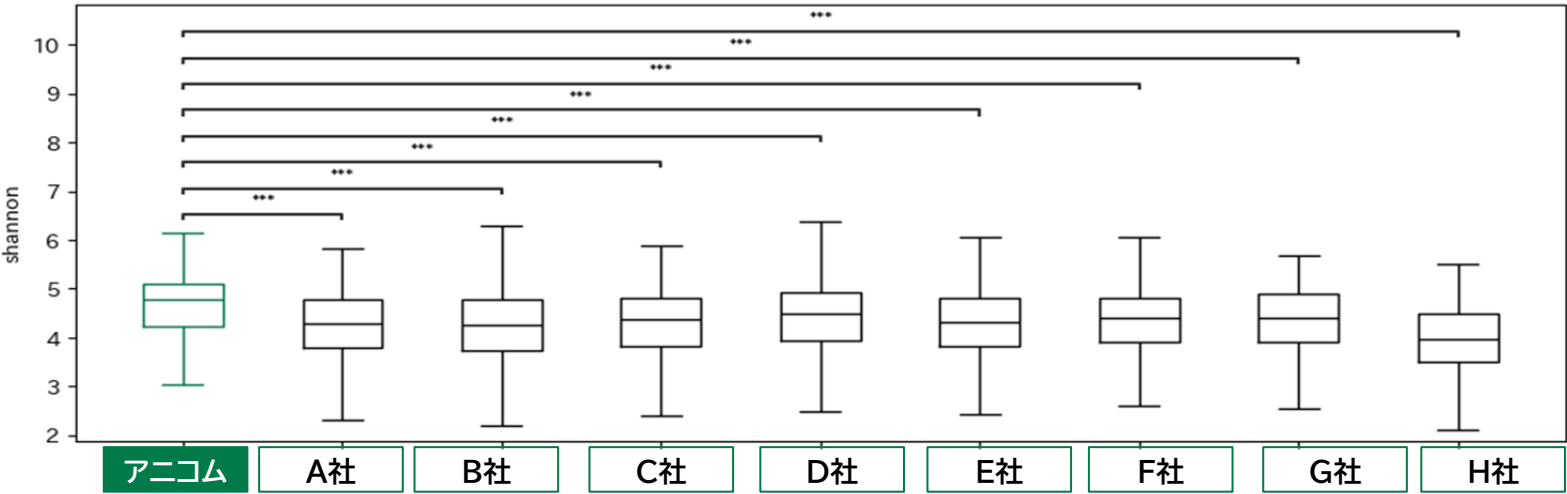
- ② これが腸内細菌叢の多様性低下を招き、死亡率・腫瘍性疾患・消化器疾患・アトピーなどの増加に繋がっている可能性があります。[\(統計情報ご参照\)](#)

死亡率は腸内細菌叢の多様性が低いほど高い



(4) 食事の多様性と腸内細菌叢の多様性

- ③ 一方、アニコム パフェ社のフードは「腸内細菌叢の多様性向上」を目的に設計。
鶏に加え、豚などのタンパク源と繊維質の増量を組み合わせるといった当社フードは
“多様性を意識した設計” コンセプトを掲げています。
社内分析では、摂食実態と腸内細菌叢の多様性に一定の相関が示唆されるケースがあり、
今後も検証を継続します。



問診情報抽出条件：
「ごはんのタイプ」ドライのみ
1種類のみ記入
「採取日」2025/1～
2025/9, N=12,814

p値: Mann-Whitney U
vs アニコム

N	230	5,053	4,170	958	815	516	361	366	345
p値	-	6.0e-18	1.8e-18	7.0e-13	5.2e-06	2.1e-11	1.0e-08	1.8e-06	4.3e-26
評価	-	***	***	***	***	***	***	***	***
平均	4.64	4.25	4.22	4.29	4.42	4.29	4.33	4.39	3.97
信頼区間(95%下限)	4.55	4.23	4.20	4.24	4.37	4.23	4.26	4.33	3.89
信頼区間(95%上限)	4.72	4.26	4.24	4.33	4.46	4.35	4.40	4.46	4.04

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～

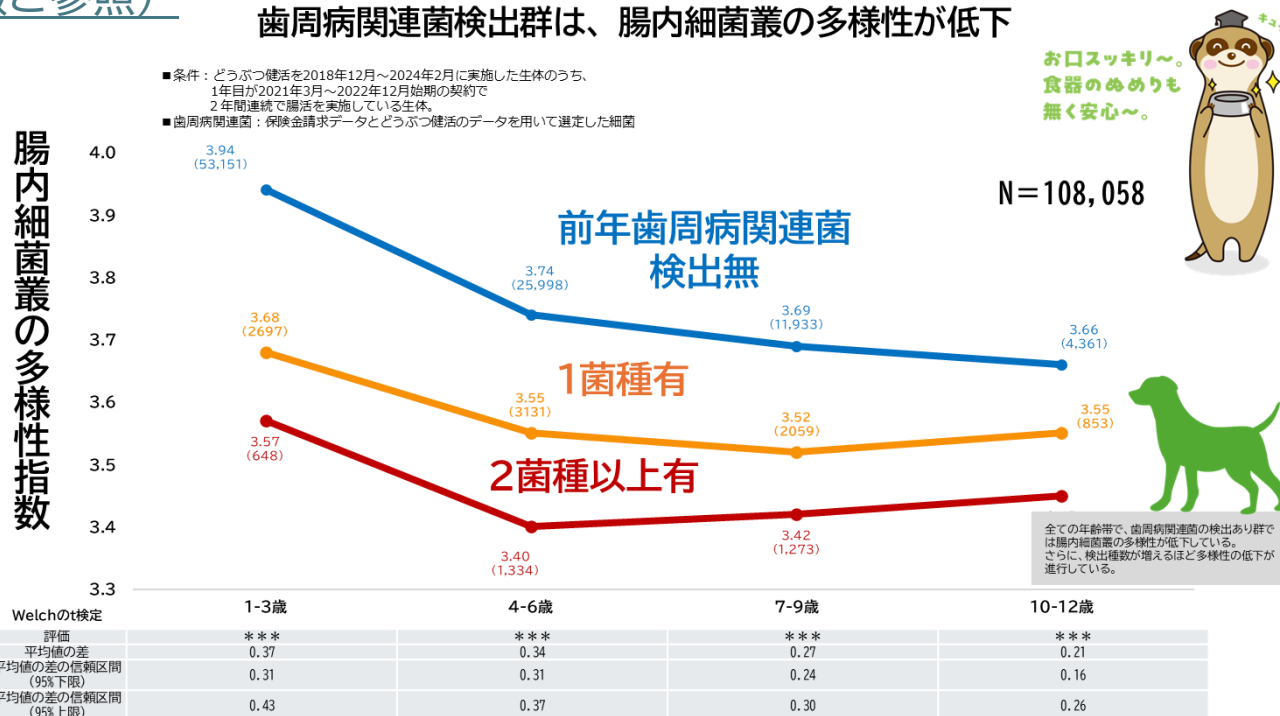


(4) 食事の多様性と腸内細菌叢の多様性

- ④ また、ペットにおいては、口腔ケア習慣の未成熟から、歯周病罹患が多くなっています。歯周病は腸内細菌叢の多様性低下等、多くの疾患リスクに関連している可能性があります。

(統計情報ご参照)

歯周病関連菌検出群は、腸内細菌叢の多様性が低下



歯周病関連菌検出無・2菌種以上有のグループ間で統計的検定実施

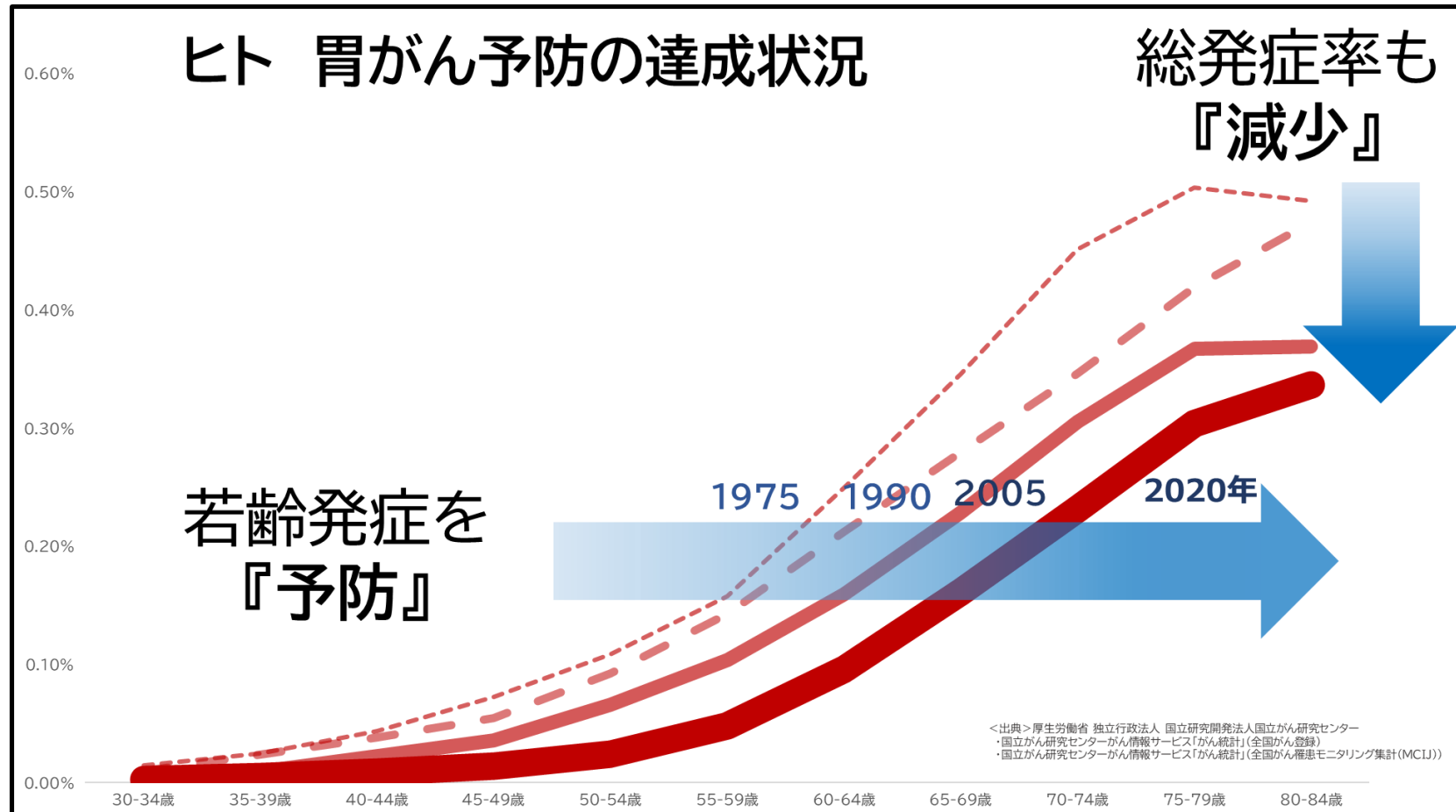
即ち、多様な食事と適切な口腔ケアは、
新たな保険における「免疫を主軸とした経営」に繋がり得て、
若齢期からの生活習慣・ケアの選択肢を広げる「保険2.0」へと進化する可能性があります。

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(5) 若齢疾患の予防と高齢化リスク

- ① ヒト医療では「ピロリ菌除去」や「禁煙」などにより胃がん・肺がんの若齢発症が一定程度抑制されています。



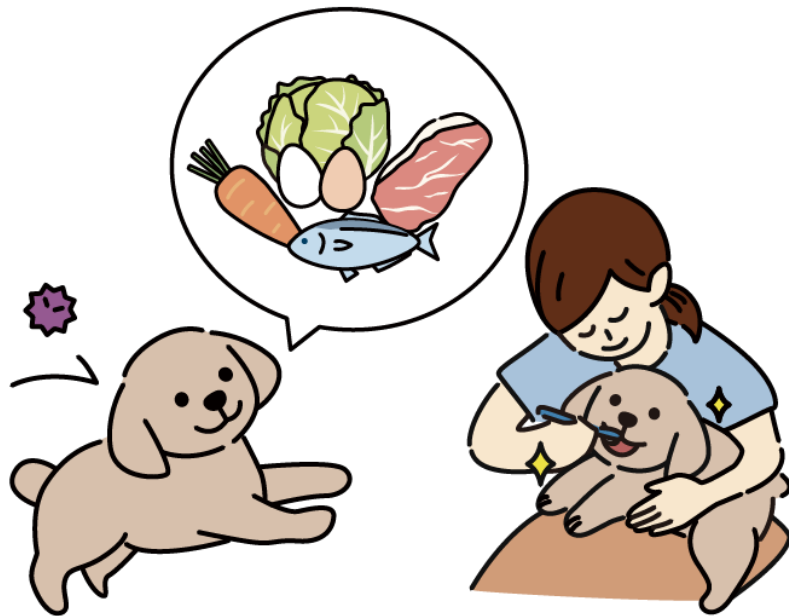
2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(5) 若齢疾患の予防と高齢化リスク

- ② 同様に、ペットでも「多様な食事」と「口腔ケア」による腸内多様性の確保が若齢疾患抑制に寄与する可能性があります。

多様な食事と毎日のお口ケアが大切!



**免疫を守る第一歩は、
飼い主さんの工夫なんです**

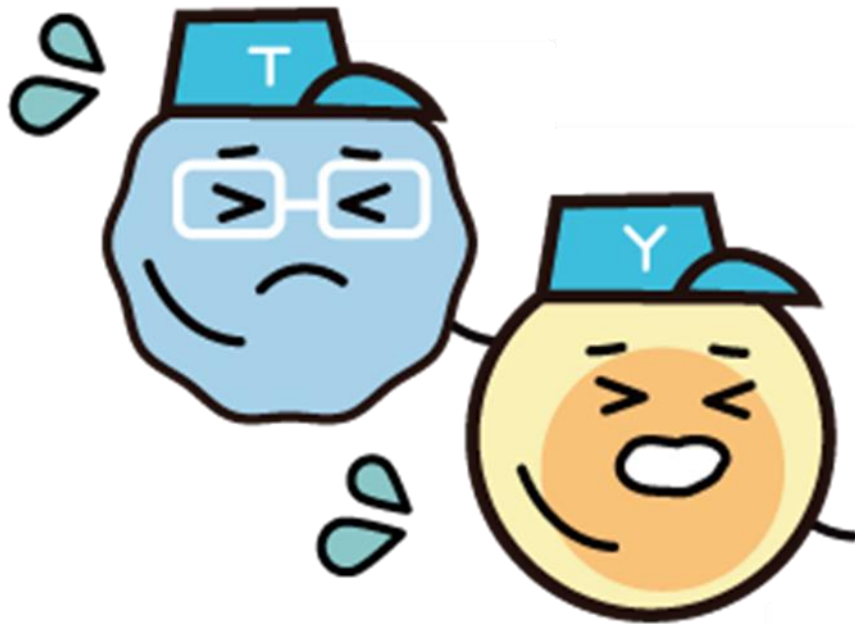


2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(5) 若齢疾患の予防と高齢化リスク

- ③ 一方で、これらにより、若齢疾患発症予防が実現したとしても、高齢化に伴う細胞機能低下（免疫老化）は避けられません。すなわち、寿命延伸は同時に保険財政の新たなリスクも生みます。



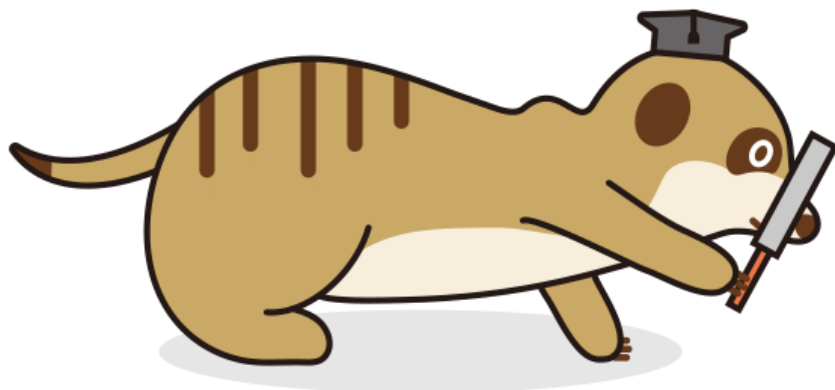
保険会社

2. 新戦略その1「保険2.0」 ～ ノーベル賞受賞と予防実現について ～



(5) 若齢疾患の予防と高齢化リスク

④ したがって、「高度医療の最適化」が重要となります。



※その1「多様な食事・口腔ケア」で若齢発症は抑制し得たとしても、高齢発症抑制は困難

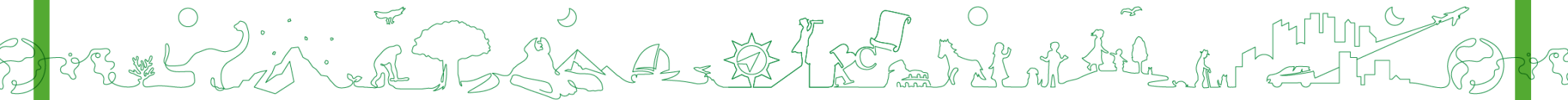
- ① 多くの疾患発症と、免疫の低下には関連があり得る。
- ② 免疫低下の最大要因に老化「加齢による細胞の機能発揮自体の弱化」がある。
- ③ 従って、ペットにおいて「多様な食事・口腔ケア」で若齢発症は抑制し得たとしても、高齢発症の抑制は困難と言える。
- ④ 高齢発症疾患にはがん等の難治症例比率の増加が想定され、より高度な医療の需要が高まり得る。
- ⑤ ヒト医療では既に、「高度医療＝高額医療」となる場合があり得て、保険財政健全性を構造的に損なうリスクに既に直面している。

その2 ペットにおける寿命延伸は、高齢化による保険財政の棄損リスクに直結し得る

- ① 保険2.0戦略の実行により、ペットの寿命の延伸に成功したとしても、高齢化による難治性疾患の増加等により保険財政棄損リスクが高まり得る。
- ② ペットにおける加齢に応じた医療費の増加は、8歳付近から急激に高まっていく。
- ③ アニコム損保における現状のポートフォリオの平均年齢は5歳付近である。
しかしながら、万が一、新規の0歳等の流入が途絶えた場合、理論上、毎年1歳ずつの平均年齢の上昇があり得る。
- ④ したがって、さらなる保険収支の改善や、保険財政の持続的な健全性維持のためには、
ヒト分野を含めた構造的な医療保険リスクの一つである「高度医療の高額化」に対処していくことが重要である。

第三部

「新戦略 その2 「保険3.0」 ～ AI1.0から3.0へ ～」



1. 医療の課題と新たな解決策について

(1) 医療の「危険・きつい・汚い (3K/3D)」という構造的課題

医療は“公共性と使命”を背負いながらも、「危険・きつい・汚い (3K/3D)」という構造的課題を抱えてきています。



1. 医療の課題と新たな解決策について

(2) 他産業で、この壁を乗り越えた共通解は「機械化」と「AI活用」

「機械化」と「AI活用」のラスト・フロンティアは——医療の手術領域です。

※その1 医療は課題を抱えている（医療格差、公共性、自己犠牲）

これらは、医療における3K（3D）が構造的原因となっている可能性がある

(1) 3K（3D）

「危険・きつい・汚い」（Dangerous・Difficult/Demeaning・Dirty）は、医療において、外科領域で特に多く見られる。

(2) 外科離れ

結果的に、外科・小児科・産婦人科で、特に、医療人員の減少が見られており、医療課題の構造的原因となっている可能性がある。

その2

(1) 全作業における3K（3D）克服の歴史

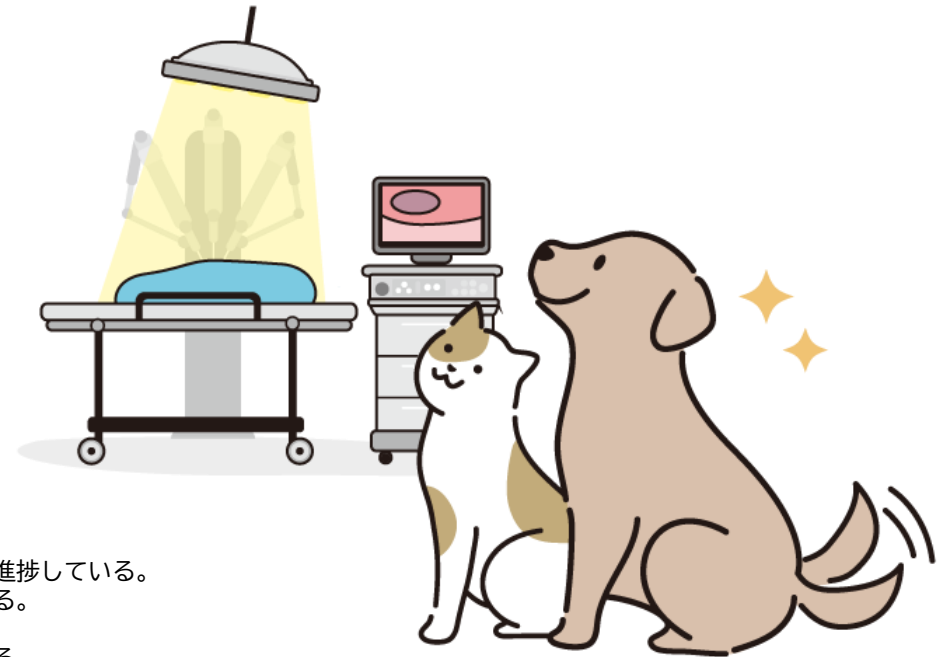
農業・漁業・鉱工業・・・金融業に至るまで、ほぼ全ての産業領域における3K（3D）の克服の共通手法は

- ① 肉体労働の機械化
- ② 頭脳労働におけるAI活用

と言い得る。

(2) 「機械化・AI活用」のラスト・フロンティアは「医療における手術」

- ① 医療における手術（オペ）
症例個別の差異性の大きさから、これまでオペにおける肉体労働の機械化は十分に進められてこなかった。
- ② ヒト医療では機械化（手術支援ロボットの活用）
既に、ヒト医療では手術支援ロボットの活用により、肉体労働の機械化が一定程度進捗している。
実際に、先行する手術支援ロボット関連各社の時価総額は数十兆円規模となっている。
- ③ 一方で、どうぶつでは未だ十分ではない
ヒト用ロボットの活用には、どうぶつでの利用実績がベースとなっていることがある。
また、哺乳類の基本構造は同様であるため、ヒトで可能となった機械利用技術は、どうぶつでの利用も考え得る。
既に、ヒト用に開発されたレントゲン・腹腔鏡等は、獣医師による裁量権のもと、世界中で有効利用されている状況にある。



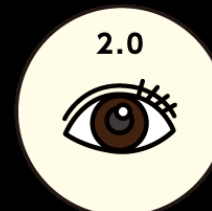
2. 医療の課題と新たな解決策について

(2) AIの進化 ～ AI1.0～3.0へ ～

①1.0 論理(言語と数字)



②2.0 視覚(画像)が追加



③3.0 遂に、触覚が追加される時代に！



手術とは、知識・視覚・触覚の三要素によって成り立つ行為と言えます。
AI3.0の実現は、手術における判断プロセスを科学的再現可能な領域へと進化させる可能性を有しており、その実現性について現在研究的検討を行っています。

3. JARVIS Tokyo プロジェクトの始動



(1) 2025年10月1日より、アニコムグループでは「JARVIS Tokyoプロジェクト」を正式に始動
動物医療における手術支援技術の高度化とAIの活用に関する取組を進めています。

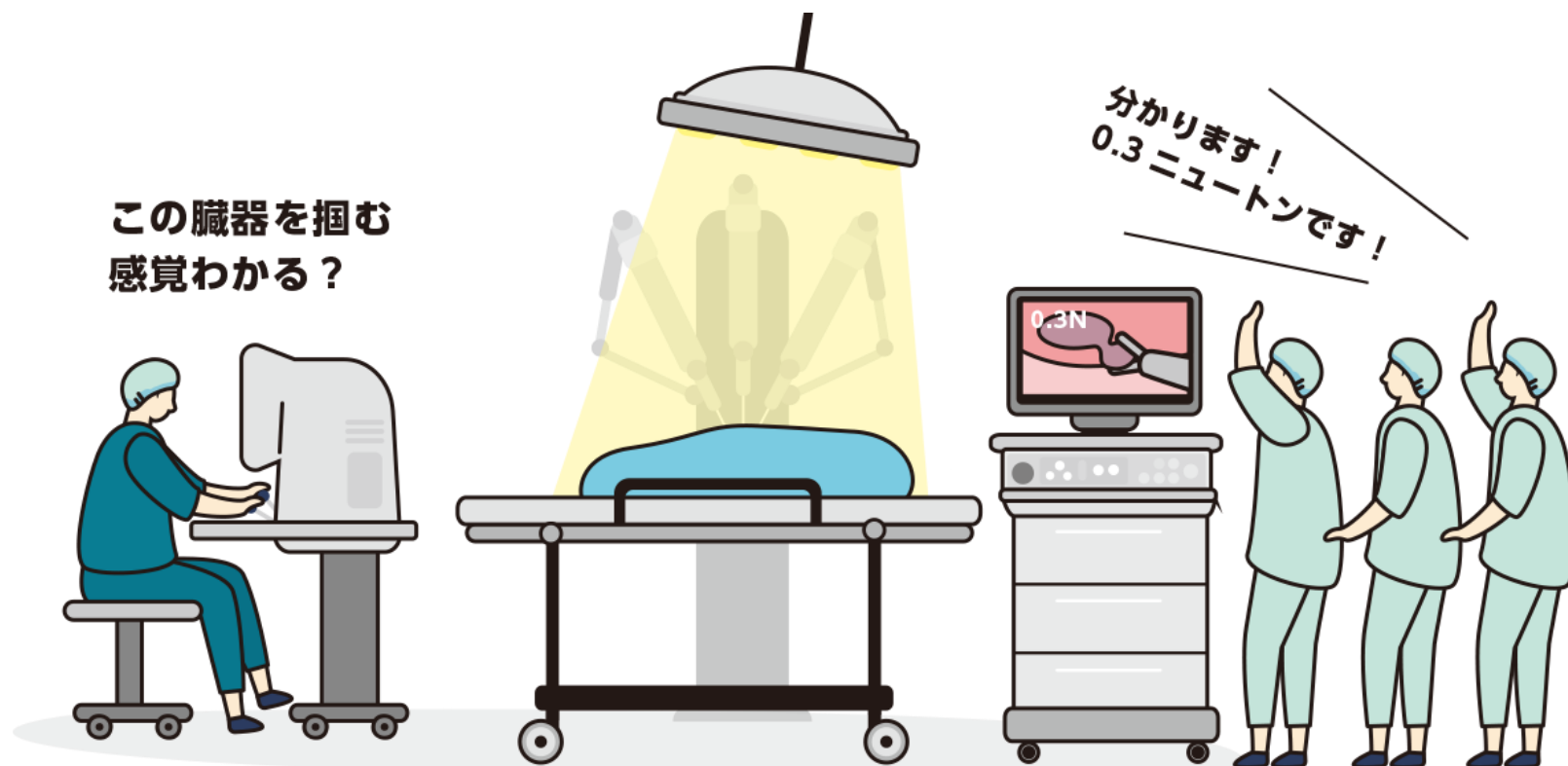
※本取組は、人医療分野で発展した手術支援技術の知見をもとに、獣医師の裁量権のもとで安全性・有効性を検討しているものです。力覚フィードバックを備えた手術支援ロボットについては、獣医療機器としての承認を受けたものではなく、診療誘引や動物用医療機器の承認を示すものではありません。
※診療は獣医師の専門的判断に基づき個別最適にて実施されます。



3. JARVIS Tokyo プロジェクトの始動

(2) ロボットの手術分野への活用は、新たなAI3.0時代への進化に繋がる可能性

ロボットの手術分野への活用により、「視覚と触覚」を統合し、手術支援領域における情報処理の高度化を目指したAI技術 — すなわちAI3.0 — の応用研究を進めています。こうした技術の発展は、医療従事者の作業負担の軽減や安全性の向上など、動物医療の質を一層高める可能性を有しています。



3. JARVIS Tokyo プロジェクトの始動

(3) さらに、どうぶつの行動や生体データから感情を解析する感情AI（日米特許取得）が加速させる

術中・術後における動物のストレス軽減に向けたAI解析技術の研究を進めており、行動や生体データの変化を指標として活用する新しい評価手法の可能性を検討しています。

感情を解析する感情AI
(特許第7330258号) (US Patent 第12,417,655号)

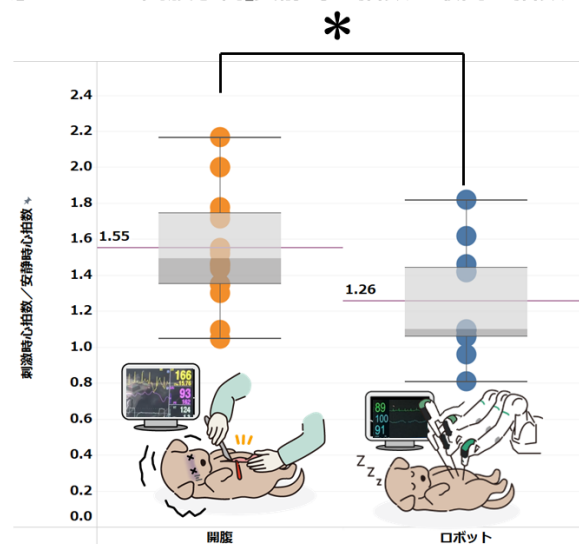


※特許は技術アイデアの保護であり、医療上の有効性・安全性や規制上の承認を意味するものではありません。

※どうぶつは小児クラスであり、より繊細な技術が必要不可欠

日本における小型犬・猫の成獣の体重は、2,000～5,000 g であり、ヒトの新生児～2か月齢の体重に相当。
日本における獣医療の未来の開拓には触覚を備えた新たなロボットの活用があり得る。

【犬】ロボオペ・開腹手術 安静時心拍数と最高心拍数の比の比較



データ数:29
■アニコム先進医療研究所(株)取得:
麻酔記録データ
犬:spay単独のみ

両群の平均値を比較したところ、
Welchのt検定(両側)で
 $p = 0.019$ (5%未満)となり、
有意な差が確認された。
対数補正による検証でも
同様の結果が得られた。

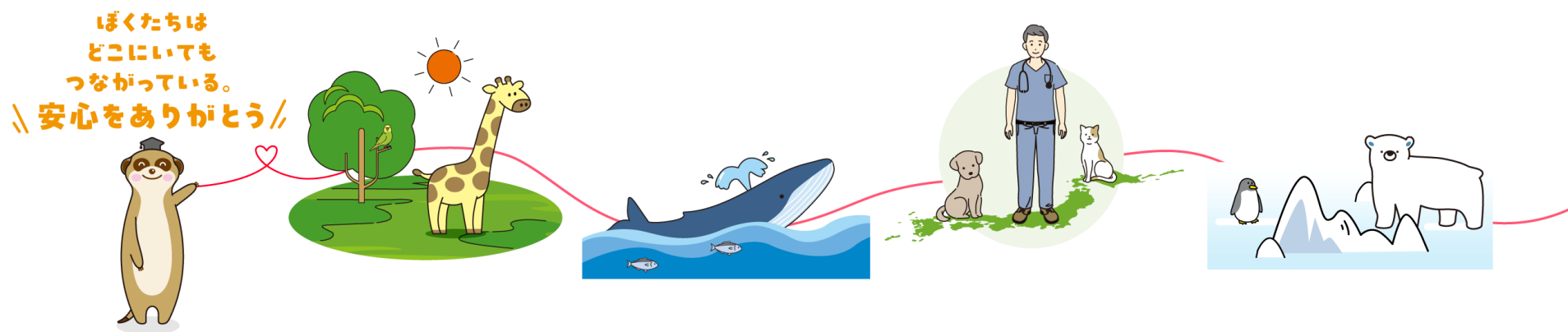
4. 「免疫×ロボ×AI」は保険・医療の共進化で未来を拓く

アニコムグループが目指すのは、

「話せないどうぶつ」と「共感できるAI」が共に協働する新たな平和な未来です。それは、テクノロジーの冷たさではなく、愛の塊とも言える優しさに満ち溢れた、どうぶつ達との共生を支える新しい社会インフラの姿とも言えます。

どうぶつ達が教えてくれる「無償の愛の力」を、世界中の人々に伝えることで、平和の回復と維持発展に繋げていく。

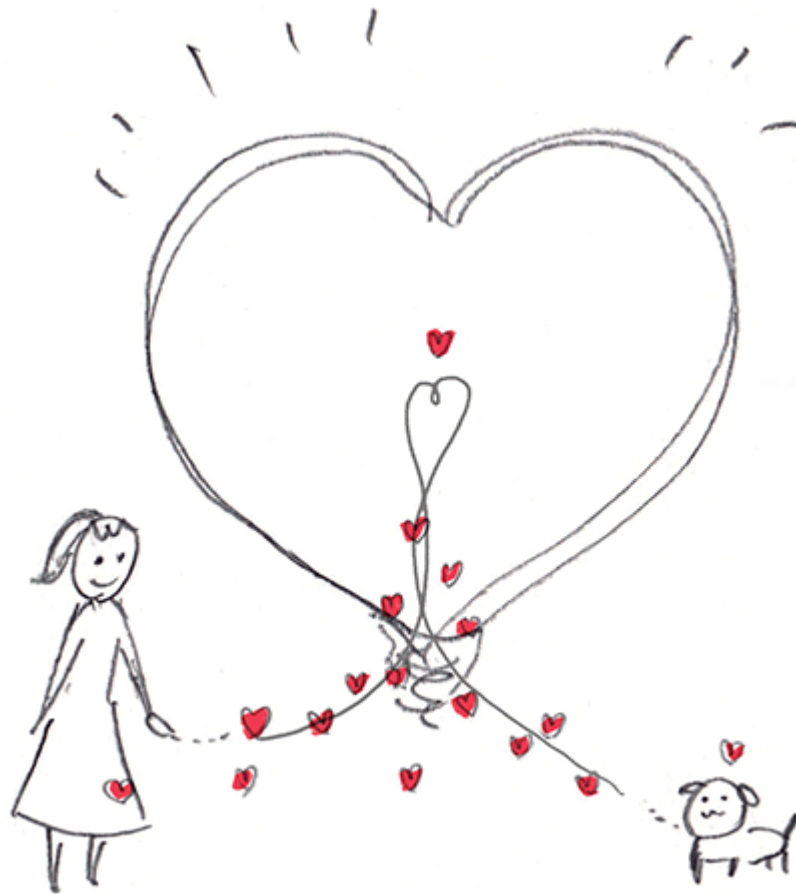
それこそがアニコムグループの使命であると私たちは考えています。



AI3.0が拓く未来は、これまでの人間能力の機能拡張とは異なる未来に繋がります。

「“保険は病気の後払い” から、“健康と医療の最適化エンジン” へ」

きみが、心の発電所。



私たちは知っています。
どうぶつが人の心を灯してくれることを。

どんなに落ち込んで帰っても
ちぎれんばかりにシッポをふって出迎えてくれる家族がいます。
私たちの弱くてもろい心を充電してくれる
世界一かわいい発電所。

そんな大きなエネルギーをくれる小さなあの子が
ずっと幸せでいられますように。

アニコムグループは、
常に、私たちが信じ、愛し続けてくれるどうぶつ達を守り抜くべく、
「保険1.0から3.0をAI1.0から3.0で実現」を新たな経営戦略として、
次の25年の未来を創ってまいります。